No. 134 November 2026

AAINews
人と農と環境をつなぐ技術を考える

国際耕種株式会社
〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403
tel　042-725-6250
fax　042-785-4332
mail aai@koushu.co.jp
URL www.koushu.co.jp

私の目指す国際協力

私は 2026 年 4 月より国際耕種株式会社に入社し、JICA 筑波にて「小規模農家の生計向上のための野菜生産技術」コースの研修指導員として従事している。

私が国際協力を志すきっかけとなったのは、大学時代に出会った「地球温暖化・砂漠化に植物栽培で挑む」という言葉である。大学の卒業論文では、塩生植物に興味を持ち、南西諸島の沿岸地域を主な分布域とする長命草（和名：コダチボタンボウフウ）の生理生態について研究した。以来、環境問題と農業を結びつけた国際協力に関心を抱くようになった。

大学卒業後は中高一貫の私立学校で教員として勤務したが、国際協力への思いが強まり、1 年で退職して JICA 海外協力隊へ応募した。当初の任国であったベナン共和国への派遣は新型コロナウイルスの影響により中止となったものの、その後、振替国であるウガンダへの派遣が決まり、国際協力の世界へ踏み出した。この派遣は、漠然と抱いていた国際協力への関心を、現場で学び、行動する決意へと変える大きな転機となった。

ウガンダでの 2 年間は、活動が行き詰まり、悩むことも多かった。しかし、現地の人々との対話を重ねる中で、少しずつ地域が抱える課題や人々の考えが見えるようになった。それらの課題に現地の人々とともに向き合い、解決に向けた活動に取り組めた経験は、私にとってかけがえのないものとなっている。一方で、自身の農業に関する知識や技術の不足は、苦い経験として心に残っている。この経験から、国際協力の現場で活動するためには、思いだけでなく、農業に関する確かな知識と技術が必要であることを実感した。

協力隊での活動を終えた後は、JICA 筑波で若手研修指導者として本コースの業務に携わった。業務を通じて栽培技術や日本の農業について学ぶとともに、研修員と各国の状況や課題について議論を交わし、世界各地の農業や社会が抱える課題への理解を深めてきた。その中で、相手の背景や課題を理解するために耳を傾ける姿勢、すなわち「傾聴」の重要性を改めて実感している。また、研修員の出身国の状況や課題を踏まえて研修内容を組み立てる過程には、教員時代の業務と重なる部分が多い。相手に寄り添いながら、それぞれが抱える課題の解決を支えるという点で、両者には共通するものがある。当時は成り行きで選んだ教員という仕事で得た経験が、現在の研修指導員としての仕事につながっていることに、今では不思議な縁を感じている。

こうした経験を重ねる中で、大学時代より抱いていた、乾燥地域で農業・農村開発に携わりたいという思いが一層強くなった。その実現に向けて、農業分野の専門性を高めるとともに、国際協力事業の計画や実施に関する経験を積みたいと考え、国際耕種への入社を決意した。

今後も現在の業務を通じて栽培技術や日本の農業、研修運営に関する知識と経験を積み重ね、将来的には開発途上国の農業振興や環境保全に携わっていきたい。これまで関心を寄せてきた陸域における森林保全と地域コミュニティーの再建・活性化に加え、海岸地域の環境保全や、島国の特性を生かした農業を通じた地域づくりについても知見を深めたい。農業を起点として、環境の保全・修復と地域コミュニティーの再建・活性化を両立させることが、私の目指す国際協力である。

（2026 年 11 月　中村信駿）

技術協力プロジェクトのスピンオフ

～予定調和を超えて、「かけあい」（Call and Response）が生む、もう一つの成果～

スピンオフは計画できるのか（最終回）

これまで 5 回にわたり、技術協力プロジェクト等において、当初の計画にはなかった新たな活動や実践が生まれる「スピンオフ」の考え方と、その具体的な事例を紹介してきた。スーダンの事例では、市場販売を目的とした野菜栽培が、紛争下で家計を守るための自家消費へと転換した。また、スリランカの帰国研修員が学んだ知識を応用し、青年農家による直売所経営へと発展させた取り組みや、パレスチナで堆肥やサイレージの生産が定着するなか、労働負担の軽減と規模拡大を目的として機械化へと展開した事例も取り上げた。さらに、スーダンでは、メスキート伐採用のノコギリが他の作物の収穫に転用され、研修用の調理器具から食堂経営が生まれた事例を紹介した。

これらに共通するのは、外部から提供された技術や知識、道具が、現場の人びとの判断と工夫によって、当初の想定とは異なるかたちで活用されていることである。そこには、技術をそのまま受け入れるのではなく、自分たちの生活や仕事に引き寄せ、意味を与え直していく姿がある。第 1 回で述べた「内在化」「内製化」とは、まさにこうした過程を指している。

では、このようなスピンオフを、計画段階から生み出すことはできるのだろうか。技術協力プロジェクトは、一般に PDM（Project Design Matrix）に基づいて設計され、活動と成果、目標が論理的に整理される。計画に沿って活動を進め、その達成状況を確認することは、協力を実施するうえで欠かせない。しかし、現場の状況は常に変化しており、人びとの関心や必要も一様ではない。計画された活動が、そのまま現場で意味を持ち続けるとは限らないのである。

今回のシリーズで紹介した事例でも、スピンオフの出発点はさまざまであった。紛争による市場環境の変化、帰国研修員の新たな着想、活動の定着に伴って顕在化した労働制約、あるいは手元にある道具の別の使い道への気づき。いずれも、あらかじめ計画に書き込めるものではなかった。しかし、こうした展開が生まれた背景には、現場の人びとが自ら考え、試し、工夫する余地があったことがうかがえる。

ここで考えたいのは、計画とスピンオフは必ずしも対立するものではないということである。計画された活動によって技術や知識を学び、道具を使う機会が生まれる。それが現場の人びとの経験や必要と結びつくことで、新たな発想や実践につながっていく。つまり、計画された活動が土台となりながらも、その先の展開は現場の人びとの判断に委ねられている。技術協力の計画とは、すべての成果をあらかじめ描ききるものではなく、現場で新たな可能性が生まれる出発点として捉えることもできるのではないだろうか。

そう考えると、スピンオフそのものを計画することはできなくても、それが生まれる可能性を広げることはできるのではないか。そのために重要なのは、計画された活動を着実に進めることに加え、現場の応答に耳を傾け、必要に応じて活動の意味や方法を問い直す姿勢である。計画から外れた動きを単なる逸脱とみなすのではなく、そこに新たな可能性を見いだし、ともに考えていくことが求められる。もちろん、計画外の展開がすべて望ましい成果につながるわけではない。新たな活動が誰に利益をもたらし、どのような負担を生むのか、また持続的に続けられるのかを見極めることも必要である。その意味でも、現場との継続的な対話、すなわち「かけあい」（Call and Response）が重要になる。

技術協力の成果は、計画された活動の達成だけで測りきれるものではない。むしろ、協力を通じて得られた知識や経験をもとに、現場の人びとが自ら判断し、新たな活動を生み出していくところに、もう一つの成果がある。私たちに求められるのは、その行き先をあらかじめ決めることではなく、人びとの試行錯誤に寄り添い、ともに学びながら、新たな可能性が生まれる余地を大切にすることではないだろうか。

国際耕種が考える「資源管理」とその「技術開発」＜その 9＞

地域の資源を生かす視点

筆者は数年前から、大分県南部の山間にある自宅で合鴨と羊を飼っている。もともとは田んぼの除草を目的に、「草刈動物」として合鴨を飼い始めた。その後、北海道で大地再生農業を実践する知人に触発され、羊も飼い始めた。羊には、遊休地の雑草管理を担ってもらうとともに、羊毛の活用も考えている。

これまで飼育経験のなかった合鴨と羊を育てるには、様々な試行錯誤や困難が伴った。病気や怪我への対処、放牧の方法、小屋や柵の設置、餌の種類や与え方など、分からないことばかりであった。本やインターネットの情報も参考にしたが、何より頼りになったのは、同じような動物を飼育した経験のある地域の人たちであった。

例えば合鴨の場合、隣の市で長年合鴨農法を実践する有機農家の知人が、飼育に関する様々な相談に乗ってくれた。小屋は鶏を飼っている親戚や友人たちが作ってくれ、日々の世話は近所の動物好きな一家が手伝ってくれた。また、田んぼでの役目を終えた合鴨は、近隣の観光牧場などに引き取ってもらうことができた。このように、地域の人々の経験と協力に支えられて、合鴨の飼育が成り立っていた。



田んぼに設置された小屋と合鴨の雛たち

一方、羊の場合、県内でも飼育している人は数えるほどしかいない。しかし、幸いにも隣には山羊を飼育している定年帰農のおじさんが住んでいる。山羊と羊は同じ反芻動物で共通点も多く、餌のこと、病気への対処、小屋や柵の設置など、困ったときには相談に乗ってもらっている。また、筆者が暮らす地域は昔から和牛生産が盛んであり、近隣の畜産農家や JA を通じた乾草の確保、使われなくなった畜舎の活用、獣医師の紹介など、長年の和牛生産を通じて培われてきた地域の畜産基盤にも助けられている。



今年初めて毛刈りに挑戦。刈った毛は紡ぐ予定

また羊毛の利用にあたっては、県内外で同じような関心を持つ女性たちや、羊毛を使った作品づくりに取り組む人たちと知り合うことができた。羊が新たな出会いをもたらしてくれ、自分一人では難しかった羊毛の加工・利用についても、実現の可能性が大きく広がった。

ただし、動物の世話には想像以上に体力や気力、時間を要するうえ、飼育に必要な環境整備や資材も欠かせない。農場に家畜を組み込むことは、誰もが容易に実践できるものではないだろう。しかし、こうした負担を軽減する面白い工夫もある。知人の合鴨農家は、雛を田んぼに放せるまで育てた後、合鴨農法を希望する近隣の農家に引き渡している。そして、田んぼで役目を終えた合鴨を回収し、一定期間飼育した後、最終的には自家消費用の肉として利用している。こうすることで、近隣の農家は田んぼでの合鴨の管理に専念でき、育雛や田んぼから引き揚げた後の管理にかかる手間を軽減できる。羊のレンタルについては、前号の AAINews で紹介したとおりである。

動物を飼うことによって見えてきたのは、地域に存在する多様な資源である。それは、自然環境や施設・資材などの目に見えるものだけでなく、地域の人々が持つ経験や知識、さらには人々の関係性やネットワークといった目に見えにくいものにも及ぶ。新たな技術の導入や資源の活用を考えるうえでは、地域にどのような自然資源があるかだけでなく、人々が持つ知識や技術、地域のつながりにも目を向け、それらをどのように生かしていけるのかという視点を大切にしていきたい。

国際耕種と私・大沼洋康＜その 1＞

国際耕種の流儀

1976 年 2 月、私は日本沙漠開発協会の嘱託研究員の一人として、アラブ首長国連邦（UAE）における沙漠緑化事業に参加するため、羽田空港を飛び立った。大学院を卒業したばかりで人生初の飛行機、初の海外勤務だった。予定より遅れたエアー・フランス機が、早朝のエメラルドグリーンに輝く海と白い砂のアラビア湾に降り立った時の感動は今でも忘れない。我々研究員の主な任務は、移動砂丘が発達した内陸のアルアイン市近郊での試験農場建設と運営に加えて、栽培試験や実験室での分析作業等広範囲に及んだ。1980 年までの 4 年間、私は共に試験農場の活動に携わった諸先輩方から「国際協力とは何か」について学んだ。当時東京大学の講師だった故小島通雅先生には特にお世話になった。先生は、「地域の自然の注意深い観察」、「現地材料を使った様々な工夫」、「地域住民との意思疎通」を常に大切にされていた。このことはサヘルの森発行の「我々の流儀（現場主義×流れのプランニング）」にも詳述されている。試験農場プロジェクト終了後、私が UAE 農漁業省に就職する道を選んだことも、小島先生に負うところが大きい。UAE 農漁業省で唯一の日本人スタッフとして過ごした 4 年間は、私にとって日本の技術協力事業に途上国側のスタッフとして参加する極めて貴重な経験となった。1984 年に UAE から帰国し、小島先生と一緒に真に地域住民の役に立つ組織を目指して、国際耕種株式会社を設立した。



沙漠の真っただ中に完成したばかりの試験農場（1977 年）

日本での勤務経験が皆無で「会社とは何か」すら分かっていなかった私を助けて国際耕種を会社らしくしてくれたのは、初期の仲間達だ。財津は会社規定や健康保険といった制度を整え、湖東はそれまで不定期に発行していたニュースレターを基に、定期発行の AAIN として 1995 年に発行を開始した。さらに、1997 年にはオマーンの首都マスカットに当時の社員全員が集まり、自分達の力で出来る範囲で草の根レベルの協力を実施しようと決意し、会社の活動の一環として「マスカット基金」を設立した。基金のキーワードを「住民参加」「適正技術」「適正規模」「持続性」「主体性」「地域特性」等とし、それらが国際耕種の流儀になったと考えている。



オマーンの首都マスカットにあるムトラの港（1997 年）

その後の多くの乾燥半乾燥地域における農業農村開発業務を通して、国際協力の最終的な目標は対象国の国づくりを担う人づくりに置かれるべきであり、現場主義に徹した息の長い活動の実践を通してこそ、現地人材との心の通った信頼関係が育まれると考えるようになった。対象国に人材が育っていれば、プロジェクト終了後も課題の発見や問題の解決を通した目標達成型の活動が、育成された人材によって末永く展開されることが期待出来るからである。

小島先生から学んだ流儀を基に、国際耕種らしさを後進に引き継いで行くためにも、私が大切にしてきた「現場主義」、「息の長い協力」、「心の通った信頼関係」等の視点を常に意識しつつ様々な業務に当たって来た積りである。また、そうすることが日本の技術協力を少しでも良くするための一つの方向性だと私は今でも思っている。本シリーズでは、これらの視点のひとつひとつについて、実例を挙げながら振り返ってみたい。